

日本病院薬剤師会雑誌 別刷

日本病院薬剤師会雑誌

*JOURNAL OF JAPANESE SOCIETY
OF HOSPITAL PHARMACISTS*

Vol.59. No.11. 2023



一般社団法人

日本病院薬剤師会

病院紹介

患者と医療スタッフの役に立つ存在に

熊本赤十字病院薬剤部

陣上 祥子 Sachiko JINGAMI

熊本赤十字病院の概要

熊本赤十字病院（以下、当院）は、490床、平均在院日数9.4日の高度急性期病院です。当院は“救急医療”を原点ととらえ、救命救急センターは、軽症の一次患者から重篤な三次患者まで“患者を断らない体制”を整えており、年間約5万人が来院します。そのため入院患者の約半数は救急からの入院となっています。また基幹災害拠点病院として災害時に大量の傷病者を受け入れることができる設計になっています。子ども医療センターでは、小児集中治療室（PICU）を設置し、救急搬送された重篤な小児患者や難病疾患をもつ小児患者を受け入れています。さらに、がん集学的治療センターでは診療科や職種の枠組みを超えて病院全体でがん治療に取り組み、また腎移植施設として腎臓に関する疾患の診断、治療、透析、そして移植までの包括的な医療を提供しています。

熊本は「日本赤十字社発祥の地」と言われています。日本の近代史最大で最後の内戦となった1877年西南の役で、敵味方区別なく救護にあたったのが博愛社であり、その後、博愛社は日本赤十字社と改称し国際赤十字の一員に加わりました。その日本赤十字社発祥ゆかりの地で、当院は昭和19年（1944年）に開設され、赤十字の精神に基づいた「人道・博愛・奉仕の実践」を基本理念として、救急医療、高度医療、人材育成、地域連携、医療救済、魅力創出を基本方針に掲げています。

赤十字の使命として、災害救護や国際救護にも積極的に参加しています。国の内外を問わず大規模な災害が発生した場合、迅速に救護班を派遣するのはもちろんのこと、常に訓練を行って人材を育成し、いざという時に備えています。

薬剤部の概要と近況

薬剤部のスタッフは、薬剤師32名、助手8名、治験事務1名です。薬物治療の最適化に貢献できるようチーム医療の実践に努めています。今年、タスク・シフト/シェアに関するプロトコルの運用規定が病院で定められ、以前から実施していた15のプロトコルに基づく薬物治療管理（protocol based pharmacotherapy management :

PBPM）について改めて病院の承認を得ました。これらが院内で周知されることで薬剤師業務への理解が深まることにも期待しています。

近年、薬剤師の業務はチーム医療や新たな部門への配置などで拡大していますが、一方で薬学生には就職先として当直のある急性期病院は避けられる傾向があり、当院も薬剤師の確保が難しくなってきました。そこで病棟業務やチーム医療を維持することを目的に、遅ればせながら2020年2月から院外処方を進めました。偶然にもその翌月に新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）パンデミックが宣言され、特例措置である0410対応の院外処方もスムーズに出すことができました。また、救急外来も一部が院外処方となり、限界まで来ていた当直の業務量も適正化しました。

そのようななか、薬剤助手は薬剤師の良きパートナーとなっています。薬剤助手の業務内容は、医薬品の製品単位の取り揃え、納品後の棚への配置、返納薬の整理、設備・機器の清掃、パンフレットや文書等の管理、物品・消耗品の管理、環境整備など多岐にわたり、早出や休日出勤もあります。薬剤師業務に専念できる点で薬剤師の満足度は高く、このような働き方の変化が学会発表にも取り組みやすい環境につながっていると考えています。次は当院の取り組みを幾つか紹介します。

腎移植外来における薬剤師業務

当院では年間20～30件の腎臓移植を行っており、九州では2番目に多い件数となっています。腎移植外来では、担当の薬剤師が週2回、その場で医師への処方提案、医療スタッフや患者からの相談応需、患者への指導、免疫抑制剤血中濃度異常値の要因分析などを行っています。移植後は、免疫抑制剤をはじめとした薬物療法が重要であり、薬剤師は薬物間相互作用や腎機能に応じた薬剤の減量などに多くかかわっています。また、移植前の患者に対しても、常用薬をチェックし、移植後に必要となる免疫抑制剤などについて説明しています。最近では、COVID-19に罹患した腎移植患者に他院でニルマトレルビル/リトナビルが処方され、タクロリムス血中濃度が

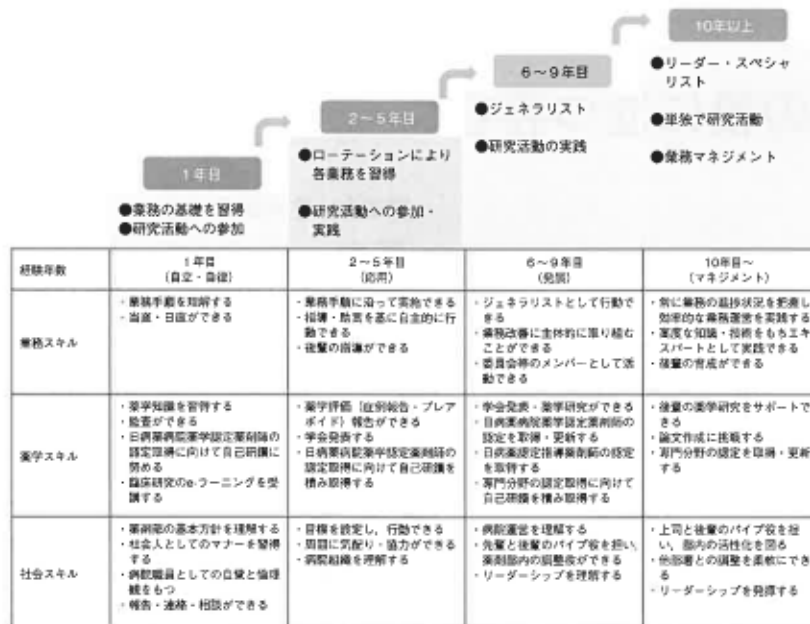


図1 薬剤師の教育方針

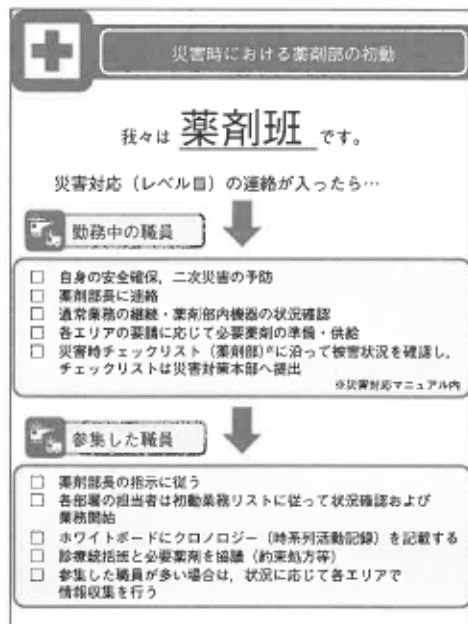


図2 災害時の初動ポスター

中毒域まで上昇した事例があり、この相互作用についても患者教育に取り組む予定としています。

薬剤師の教育方針

薬剤師における教育方針は、図1の通り業務スキル、薬学スキル、社会スキルに分けて経験年数ごとに到達目標を示しています。例えば、2年目以降では業務のローテーションがあり、症例報告やプレアポイド報告ができるのが目標の1つであることを、この図で認識してもらうようにしています。日病薬病院薬学認定薬剤師の制度ができた時にもこのなかに盛り込んで、入職後はまずこの認定を目指すようにし、現在4年目以上の薬剤師の8割以上が取得できています。その後は専門分野の資格を目指しますが、現在8領域で取得しており、取得や更新の費用もサポートしています。また今年度から、臨床研究のe-ラーニング受講を1年目の項目に入れました。この教育方針は、職員のスキル向上のための指標となるばかりでなく、薬学生にとっても就職後のキャリアプランの参考になればと思っています。

災害救護に携わる薬剤師の育成

2016年の熊本地震では、震源に最も近い災害拠点病院となり地震発生直後より多くの患者を受け入れました。想定外のことも起きましたが、平時からの訓練や地震に対する備え、医薬品卸や調剤機器メーカーの協力で薬剤師の機能を保つことができました。当院では、2011年の東日本大震災における活動経験から受援体制を整備し

ており、災害時の初動ポスターが各部署に常時掲示されています(図2)。薬剤師も救護班の一員として定期的に訓練を受けており、新人薬剤師の研修では救護用医薬品を取り揃えて専用バッグに準備する練習も取り入れています。災害時に求められる薬剤師職能は日常業務そのものであるため、救護班に所属するのは、ジェネラリストとして行動できる入職4～5年目以降を目安としています。2020年の豪雨災害では合計7名の薬剤師を派遣し、そのうち3名は初めての派遣となりました。

終わりに

薬剤師は、中央業務や病棟業務をはじめ多くのチーム医療にかかわり、その多くは兼任で実施しています。少子化が進んでいることから、今後も限られた人数で業務を遂行せざるを得ない状況は続くと考えられます。一方、医療が高度化するなか、最適な薬物治療を実施し薬による医療事故を減らすには、専門性を高めた薬剤師が必要とされることでしょう。今後も当院薬剤師は、患者や医療スタッフのお役に立てるよう尽力してまいります。

連絡先

熊本赤十字病院

〒861-8520 熊本県熊本市東区長嶺南2-1-1

☎096-384-2111

熊本赤十字病院URL: <https://www.kumamoto-med.jrc.or.jp/>

薬剤師紹介URL: https://www.kumamoto-med.jrc.or.jp/medical/recruit/medical-staff/pharmacist#medical_pharmacist_se